

## テーマ 「よく見て、よく考えて、なんでもする子」

## 0・1才の目標・ねらい

- 野外で過ごすことを楽しむ
- 気候の変化や季節の移り変わりを感じる
- 運動機能の発達を促す

## ふりかえり

- ・新しい環境や保育者に慣れ、安定した生活が送れるようになると保育室が落ち着く場所になる。保育室で遊びが楽しめるようになると、室内だけではなく外にも出かけ活動場所を増やすようにした。外に出ると開放的になるだけではなく、目に見るもの、触るもの、体で感じるものが新鮮で小さい子どもなりに「何？」と興味を持つ様子が見られる。その興味が増すように保育者も一緒に感じ、物に触れる時はその物の名前を知らせ言葉の獲得にもつなげた。また「～ね」と思いをくみ取るだけではなく、共感するようにもしたが、関わり方で子どもの反応は違ってくるので、保育者の役割がいかに大切だということを感じた。
- ・身の周りのことへの意識も現れ、個々に応じての取り組みを行うようにし、興味が増すように励ましたり、出来たことを一緒に喜ぶようにすることで子どもの意欲につながるようした。前年度の反省である基本的な生活習慣の自立に向けての個別の配慮に関して、昨年が援助をし過ぎたとあったので今年度は各保育者が対応を意識し過剰にならないようにした。
- ・外での活動では、「春の風を気持ちいい」夏の水遊びでは「水が気持ちいい」冬の風は「冷たい」と体で感じる経験。雨の降る日は雨の音を聞く、木々の揺れる様子を見るなど全身で感じられる経験をし、それを保育者も一緒に感じ、その思いを共感するようにした。
- ・這い這いからつかまり立ち、歩行への成長が見られそれぞれの発達に合わせた運動遊びを取り入れるようにした。子どもがその遊びをしてみたい、という思いを受け止め援助を行うことで「できた」という思いを一緒に喜び、十分に褒めるようにした。活動が活発になった反面、危険な遊びをする子どももいたため、遊具を使う際は使い方をその都度伝え側につくようにし、事故や怪我を未然に防ぐようにした。活動は月齢の高い子どもに合わせてしまうことがあったので、小さい子どもにもあった対応を考える必要があった。

## 2・3才の目標・ねらい

- 環境の変化に気づき、興味や関心を持つ
- 体力の増進を図る

### ふりかえり

- ・戸外での活動を楽しみ経験することで興味、関心が見られるようになる。作物の苗や種を植えることでその名前を知り、生長の様子を保育者や友だちと観察するようにした。  
変化に気づくと「なぜ?」「どうなるの?」と疑問に思い保育者に尋ねる姿がある。年齢にあった説明の仕方を考え、子どもが納得できるようにした。
- ・雨の後、作物の生長を見ることで、よく育っていることが確認でき、見て気付くのはもちろん、大きくなるためには何が必要かを保育者が伝えることでより理解できるようにした。
- ・生活の中で身の回りのことは保育者が援助し過ぎないように、自分で出来ることを増やしていくようにした。保育者はどのような援助をすればよいかを考え接することで子どもの満足感につながれるようにしたことでそれが自信になり、遊びを行うことへの準備にもつながったが、援助し過ぎた、と反省することもあった。
- ・遊びを保育者と一緒に経験していくと、遊び方も回数を重ねるごとに変化が見られ、子どもなりに理解して取り組んでいると感じることもあった。自らが行動することもあり、遊びに対しての取り組み方も違ってきていると感じ、実際子ども達が楽しさを十分に味わっている様子も見られた。
- ・環境の変化に気づく経験として、室内だけではなく戸外での経験で気付くことがたくさんあり、気付いたことを声に出す様子が見られた。自身の目や耳、体全体を使って感じる経験を保育者に伝え、保育者も思いを共感することで環境の変化を理解出来るようにした。興味、関心は個々によって違い、まだまだ保育者の関わりで気付くことは多くいので、気付きを引き出す内容を考えるだけでなく、保育者の十分な関わりが重要であると感じた。取り組みの時間が少なかったと感じることがあったのでより計画的に進めていく必要があった。
- ・外での活動が活発になると、園外にも出かけるようにし、階段や坂道を通るようにし、体力の増進に務めた。個々の体力や運動機能には個人差が見られたが、集団活動が多かったので、個々に沿っての接し方が必要である。より意識して取り組みを考えるようにしていきたい。

#### 4・5才の目標・ねらい

- 自発的に活動しようとする
- 状況に適応できるようになる
- 身体的バランス能力を育む

#### ふりかえり

- ・活動に慣れてくると、自ら遊びに必要な物を考えられるようにした。必要な物を先に伝えるのではなく、活動の内容をまず伝え、そこから何が必要なかを考えるようにすると、それが遊びにもつながり、想像力が増すだけではなく、物事の子測もできるようになってきた。
- ・活動の中には、観察する時間も多く持つようにした。身近な虫は触れたり、捕まえるだけではなく、育てることでより関心が持てるようにした。その経過で不思議に思ったことは保育者に尋ねていたが、徐々に自ら調べるようになり、調べてわかると満足する姿があった。わかったことを他の友だちにも知らせるように声をかけると、友だちだけではなく異年齢児にも知らせ関わる姿も見られた。
- ・観察場所は同じ場所に定期的に行くことで、変化にも感じられるようにした。自然の変化では木々や花の様子で季節を感じ、虫探しではその生育場所を考え探索した。発見出来ない時は、どうしてか？を考えることで思考力が向上できるようにした。子どもの気付きや探求心には差があるので、関心の低い子どもには援助したり、またその気づきを発表する機会を持つようにしたことで、より自らしてみよう、とする気持ちにつながるようにした。また、子どもの気付きや疑問が生かせるように、後日実践してみることで、みんなで共に考え、解決につなげ協調性も養えるようにした。
- ・運動面では、遊具や運動器具を使用しての遊びを日頃から行うことで楽しさから成功につながるようにした。結果だけではなくとりくみも評価し、個々にあった対応を行うことで、その子どもに適切な関わりができるようにしたが、取り組みに消極的な子どももいた。励ましたり、成功に近づいていることをつたえ、できるイメージを感じられるようにした。それぞれの遊びはいくつもの運動につながっていることの大切さを何度も話し、他のことに対する意欲の向上にも結び付くようにもした。

- ・年間の取り組みを、職員で共有し保育を行っていく中で、期ごと終了後には各リーダーの保育者との評価会を行い、次期の取り組みについての話し合いをしたうえでその後進めていくようにした。振り返りには自身が反省するだけでなく、他のクラスの理解にもなった。問題点が出てくるとすぐに話し合いし改善を行い、それらを他の職員に伝えることで全職員が同じ思いで保育を進めていくことにした。
- ・行事においては各役割を分担し、その係が中心となって進めていくことにしたが、他の職員からの意見やアイデアがあればそれらも含めて考えただけ良い方法で行えるようにしたが、うまくいかなかったこと、そうすれば良かったと考えることも多々ありそれらはまた職員会議に出し、意見交換することで次回に生かせるようにした。
- ・職員の質の向上のために、園外の研修に参加するだけでなく、園内の研修も行った。  
園外の研修は参加後に職員会議で内容を発表し保育に生かせるようにした。研修報告を自身の目で読み通すことで、より理解できるようにもした。保育士等キャリアアップ研修に参加する者は、講師の方の話を聞くだけでなく、他園の職員との交流会で学ぶことも多くありより自身の向上を意識できる機会となる。  
フィールドワーク研修で学ぶ内容は、園が野外活動中心に行っていることから、遊びの中に繰り返し、すぐに実践できるものとなり職員会議の場で職員がワーク体験をした後、クラスでの取り組みを行い、子どもの様子を伝え合うようにもした。
- ・園内研修では、事例に基づく意見交換を行い、子ども自身の立場で考えられるようにしたが、実際の保育で問題点がほかにもある、と感じることがあり、研修での意見交換の仕方や保育者自身が本来の問題点を意識しないと、改善されないと感じることもあった。次年度これらをよく考え、園内研修の時間を充実させたい。
- ・領域に沿った内容で保育を進める中で、小学校まで育てほしい姿をイメージし「10の力」の育みたい内容を実際に繰り返し込まれるようにした。イメージすることはもちろんだが、小さいうちからの経験がつながることで「10の力」に結びつくことを十分に保育者は理解し、各年齢にあった取り組みを行うようにした。  
育みたい内容は野外活動の中で、経験を重ね身につくことがたくさんあったが、個人の取り組みや発達は違うので、それは十分に考えて個別に行うようにもした。小学校への交流会の経験から子ども自身が期待を持つだけでなく、個々の力が沿うように対応した。